

## 滋賀県立大学 工学部 材料科学科 滞在記

デンマーク オルボーグ大学 化学科

ヘルマンセン クリスチャン

### My Stay at The University of Shiga Prefecture

Christian Hermansen

Section of Chemistry, Aalborg University, Denmark

#### はじめに

2010年9月に私の修士として最後の学期が始まった。修士論文のテーマはガラスの表面強度についてで、オルボーグ大学のユエ・ユアンジェン (Yuanzheng Yue, 岳遠征) 先生によって滋賀県立大学と日本電気硝子との協力から生まれた。

私は化学工業の学士号だから、修士の学生になるまでガラス科学のことに全然経験はなかった。だが、直ぐに気になった。ガラス関係の文献を読むと、ガラスの正体は誰も知らない気がした。どうしてこの組成はガラス形成ができるが、他の組成はできないか？ガラス転移現象の本質はなにか？ガラスはどんな構造か？こんな基本的な質問が大部分解けていなくて、すべてをつなぐ統一理論にはいまだ手が届かない。

数年前、私は外国で修士論文を書こうと決めた。デンマーク人には高校を卒業してから1年間の世界旅行をすることは普通だ。私もその頃そうしようと思ったが、旅の道連れがいなくて行かなかった。外国に一人で行くのは怖いだ

ろう。友達が1人ずつ戻ってきて息を継がずに面白い旅のことを話すと、私は切なくて後悔した。だから、修士論文を書くときは簡単に留学できると言われて、二度とみすみすチャンスを逃さないようにした。

#### 松岡先生

彼は私が思ったような人ではない。残暑のゆえに袖がまくり上がって、シャツの上の二つのボタンが外されていた。それにもかかわらず大粒の汗が額に流していた。その容姿と大きい笑顔が私に陽気なおじさんようなイメージを送った。私は彼が事務員か実験担当者だと思った。「すみません、松岡先生はどこですか？」と聞いた。「私が松岡です」彼は大笑して答えた。

私が思ったより、松岡先生は厳しい教師という評判だった。月例報告会の際、松岡先生は必ず雄ライオンみたいにブラブラと一番後ろの席を選んで群れを監督した。生徒の発表が終わるとくだけた口調で質問を限りなく繰り返す。答えが出てこないと学生を叱った。間違いなく、松岡先生は厳しい。でも、私が次第に質問と答えを解るようになると、それは確かに妥当な反応だと思った。敵意ではなく、松岡先生のふるまいはライオンの父親のように群れの面倒を見ることだった。

## 月報会

毎月、セラミック研究室の学生は先生達と仲間の学生に発表した。この際は月報会と呼ばれた。初めて発表するとき、少し怖かった。皆は英語の論文が読めるから、文語英語が解るだろう。私は発表のキーワードと解りやすい図式を2ページの配布資料に書いて頼みの綱にした。元気に発表できた。終えたら仲間の学生達はポカンとした顔や眠そうな顔しかない。しかし報告会はもう始まって8時間も経っていたので、私はその事をあまり心配しなかった。

打ち上げで私のチューターの板倉さんに発表はどうだったかと自信満々で聞くと、「わけわからん！」と正直に答えられた。痛感させられてがっかりしたが、次の日、仲間の学生に理解させるようにしようと思った。

次の月、私は解りやすい発表にした。基本的な単語を選んだり、ゆっくり話したり、発音をじっくりとしたりした。今回は眠そう顔はなし。喜んだ。数分後、板倉さんに今から日本語で発表するように言われた。ショックだった。それにとっても不安だった。異議を唱えたかったが、そのときは、松岡先生が送った命令だと思った。その後、それは違うと理解した。松岡先生はいつも学生達が英語力を高めるように応援していた。それは学生仲間によるものだった。私は応えようとしたが、難しかった。

## 日本語を習得すること

来日する前に私は数ヶ月日本語を自分で勉強した。そうして基本的な話と常用漢字の意味と書き方ができるようになった。日本に到着したら、この日本語力が全然足りないとわかった。子供みたいに毎日他の人々に頼まなければならなかった。留学や外国で仕事をした人はこの気持ち解るかもしれない。他の人がゆっくり話していた1対1の会話も難しく、食堂で食べながら話を理解することは無理だった。私は社交的な性格であり、寂しくなった。

しかし、良い滞在をしようと思った。大学で日本語の授業に登録した。授業は中級だった。それに全部日本語で行われた。授業が終わって板倉さんの「わけわからん！」を鋭く感じた。

初級授業は次の学期までなかった。それで、自分で勉強するしかなかった。あのとき、私は4歳の子供より日本語が話せた。直ぐ上手になりたければ、4歳の子供が日本語を習得するようにしようと思った。つまり、人々に絶え間なく「あれは何」と聞いたり、漫画をいっぱい読んだり、アニメを見たり、恥ずかしがらないで知らない人に話し掛けたりした。英語とデンマーク語はあまり使わなかった。

実は、初めて月報会で日本語で発表したときは簡単だった。原稿は他の学生の報告のまねをして、板倉さんが編集してくれて作られた物だった。そして私はあまり知らない言葉にふりがなを付けた。月報会では原稿を音読するだけ。簡単だろう。しかし、汗が出たし、声も変わったし、物凄く緊張した。でも、この経験があったので、プレゼンテーション技能が上がった。今はいつも発表する前に「落ちついて、簡単だよ。少なくとも英語なんだから」と自分に言い聞かせている。

月報会の際、発表していない時間は他の学生の原稿を一所懸命に勉強した。このようにいつも日本語を使ったので、数ヶ月で普通の話とガラス関係の基本的な単語を理解できるようになった。今、村上春樹の1Q84を読んでいる。大好きな著者だ。

## 日本電気硝子 (NEG)

日本電気硝子は滋賀県大津市に本社をおくガラスメーカーだ。主製品はフラットパネルディスプレイ用ガラスだ。日本電気硝子は親切に私の研究に協力し、資金も提供してくれた。

初めて会社に行く準備をしたとき、東京大学で勉強した外国人の友達と言ったことを思い出した。友達は正式な晩餐会に誘われたが、タイをちゃんと着けていなかったのでドアで断られ

てしまった。だから、私はきちんとスーツとタイにした。会議室で取締役を待っていたとき、会社の目立たない制服を着た中年男性が部屋に入って私に名刺を渡した。「常務取締役 山本茂」と書かれていた。私は飛び出して丁寧にお礼しながら、恥ずかしくて、スーツを着てきたのは間違いだろうと思った。

日本電気硝子と協力をするのはいい経験だった。私は一週間会社で実験したので、エンジニアの生活が少しだけ味わえた。働く時間が長かったが、コミュニティー感覚が好きだった。

### 労働倫理

デンマークでは、一週間の労働時間は法律で37時間と決まっている。残業は自由で時間外手当は普通の賃金の2倍だ。言うまでもなく、日本の労働倫理は悪名高い。私は、週60時間以上を大学で過ごす事がセラミック研究室ではあたりまえという事におどろいた。松岡先生も例外ではなく、いつもは1日12時間以上も働いている。NEGの山崎部長（現在は執行役員）

は通常は週6日半働いている。自由時間にすることはあまり無かったので、私も同じようにした。

長い時間仕事をするのは、次第に困難になった。特に私の生活がつまらない時はそうだった。日本に来て最初の3ヶ月は私の人生の中で最もつらい時期だった。大晦日から少したった頃、それはピークを迎えた。そのとき、私はある行動を起こそうと決意した。私はすぐさま、夜中の11時、12時まで起きていることをやめ、もっと活動的な社会生活をしようと努力した。私の2011年からのカレンダーには、英語クラブのいくつかのイベントや、京都や大阪で行われる様々な国際的なパーティー、それらで出会った友達と会うこと、ネット上の言語交換サイトでの会話、NEG社員によって開かれるハウスパーティー、弓道、そして、ほんの少しの日本旅行が入った。

私が大学で過ごした時間は週およそ40時間でしたが、仕事に集中したのは25時間しかありませんでした。



写真 1 懐石料理店での食事。手前左から時計回りに、加藤嘉成博士 (NEG)、山崎博樹部長 (NEG)、山本茂常務 (NEG)、著者、松岡純教授 (滋賀県立大学)、Yuanzheng Yue 教授 (オールボルグ大学)、Tanguy Rouxel 教授 (レンヌ第一大学)、吉田智准教授 (滋賀県立大学)

吉田先生、私の知る中で最も優れた監督である吉田先生は、私の滞在が終わりに近づいた頃、私を驚かせました。「クリスチャン、あなたは私の一番の学生です。」この言葉がどれだけ真実なのかは、私にはわかりません。

## 英語クラブ

私の日本語能力は、日本に来てから数ヶ月でとても向上し、落ち着いて会話できるようになりましたが、それでも寂しさは問題でした。他の修士の学生と友達になることは困難でした。彼らは研究とアルバイトで忙しかつたのです。富川さんの日本語クラスの学生は、中国人の学部生で、研究の時間は短かつたのですが、授業料や生活費を払う為に長い時間をアルバイトに費やしていました。私は、友達をつくる事がもっとも見込めるクラブに加わりました。英語クラブです。

うれしいことに、クラブの活動は英語に関することはほとんどありませんでした。私たちは、毎日、おしゃべりのために、昼食時に30分集まったり、クラブのメンバーの一人による日本語による15分間の英語クラスをしたりし

ました。もう一つの活動はクラブの核でした。大学祭では、スタンドをつくって沖縄のドーナツ、サーターアンタギーを売りました。私はサーターアンタギーを揚げている間、必死に松岡先生に見られないように顔を隠していました。私の日本滞在はあと数ヶ月しかなかったのに、しなければいけない実験も残っていましたし、論文も書かなければならなかったからです。彼がスタンドの中の背の高い白い男が誰なのか、顔を見なければわからないだろうという考えは、少し甘かつたかもしれません。私は大学内で唯一の西洋人だったので。しかし松岡先生は大学祭で私を見かけましたが、私に苦言を言いに来ようとはしなかつたようでした。

## 結論

私はこの小文で、日本に滞在中の私自身の気持ちや考えを伝えようとし、読み手が何かの価値か楽しみを、私のかなり不明瞭な文書を通じて発見してくれることを願いました。全般的に言えば、日本滞在の1年は積極的で人生を変える経験でした。もし最初の3ヶ月が人生の



写真2 大学祭で英語クラブが沖縄のドーナツ（サーターアンタギー）を売っているところ

中で最もつらい時期だったとすれば、残りの期間は埋め合わせ以上の時期になりました。現在では、日本は私にとって第二の故郷のようなものです。

卒業してからは、私は高校卒業後にできなかった旅を実行し、5ヶ月かけて東南アジアを横断しました。すばらしい旅でした。現在、私は博士号を取得するため、オルボーグ大学のユ

エ先生のもとで勉強しています。滋賀県立大学と日本電気硝子（NEG）での仕事の結果は、中国の湖北省で開かれる非晶質物理国際会議で発表しますので、みなさんに来ていただけると嬉しいです。

（この文章は英文原稿をもとに、約2/3を著者自身、残り1/3を松岡玄が和訳し、編集委員が校閲した。）

